

第4章

# アフリカの熱帯雨林

ツル植物がからんだ樹木（コアラップ国立公園／カメルーン）

## 氷河期を生き残ったアフリカの熱帯の森

アフリカの熱帯雨林のおよそ80%は、コンゴ盆地を中心とした中央アフリカに広がっている。東アフリカでは疎林が広がり、熱帯雨林は肥沃な山地に離れ島のように存在する。

このアフリカの熱帯雨林は、氷河期の厳しい乾燥を乗り越え、動植物の豊富な森を形成してきた。熱帯雨林を襲った氷河期は、南アメリカに比べ、とりわけアフリカでの影響が大きかったといわれる。

熱帯雨林は、何度も訪れた氷河期の中で縮小と拡大を繰り返しながら、海の中に浮かぶ島のように周囲から孤立して残り続けてきた。最終氷河期を生き残り、隔離された熱帯雨林地帯は、動植物の避難地という意味で「レフュジア」と呼ばれている。

現在でもレフュジアと呼ばれる地域は、周辺に比べて動植物の種類が多く、また種の多様性に富んでいるといわれている。降水量も多く、ほとんど乾季のない、水に恵まれた場所となっている。

レフュジアは、アフリカでは高地ギニア、カメルーン、ガボン、コンゴ盆地の東端に残されている。中・南アメリカではアマゾン河流域を中心に確認されている。

東南アジアの熱帯雨林は、周りの海水温が高く、また氷河期の南下も顕著でなかったため氷河期の影響が少なかった。避難地というよりも、地域全体が一定の状況で存続してきたことになる。

アフリカにおける氷河期の様子をもう少し詳しくみると、今から2万年から1万2000年前（最終氷期の最寒冷期）の間、アフリ

カ大陸は厳しい乾燥に襲われている。カメルーンの北端にあるチャド湖は干上がり、ビクトリア湖の水位が下がり、白ナイル川への水の流出が止まった。

キリマンジャロやケニア山などでは、現在より気温が5～8度低下し、より乾燥していた。またコンゴ盆地やギニア湾岸の熱帯雨林地帯でも、気温が4～5度低下し、厳しい乾燥気候となった。

この時、レフュジアはコンゴ盆地東部、ギニア湾岸のカメルーン、ガボン、シエラレオネなどに点在するに過ぎなかった。

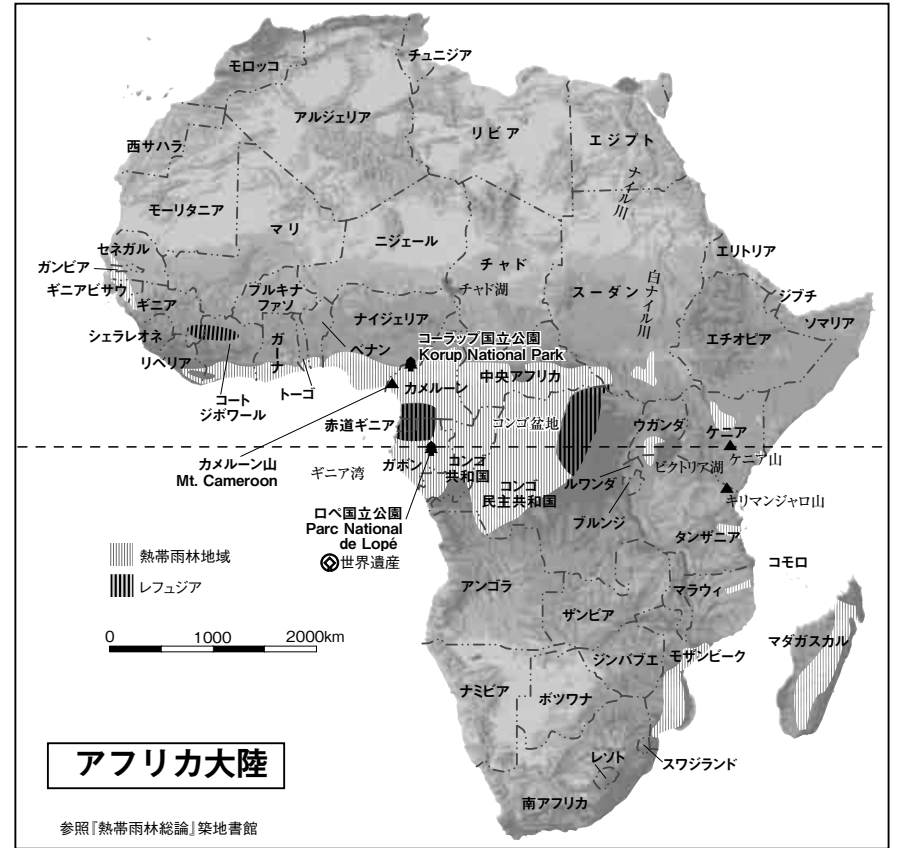
1万年から8000年前ほどの間に、熱帯雨林は回復し、チャド湖の水位は現在より40mも上昇した。現在のチャド湖周辺は砂漠地帯だが、8000年前頃はここに人々が住み始め、漁労や狩猟を行っていた。

7500年前頃になると、地球全体が一時的に寒冷化し、熱帯アフリカでも厳しい乾燥に襲われたが、7000～5000年前には、再び大地は緑となった。

4500年前頃から地球の冷却化が始まり、サハラの中・南部は急速に乾燥化するようになった。さらに砂漠化とステップ化が進行し、赤道森林地帯では、3000年前頃から現代にいたるまで、森林の退行とサバンナ化が進んでいる。



生き残った森  
(コーラップ国立公園／カメルーン)



混在する森林とサバンナ  
(ロベ国立公園／ガボン)

# アフリカ最古の森 コーラップ国立公園

(カメルーン)

Korup National Park / Cameroon



氷河期を生き残ってきたコーラップの森。620以上の樹種が育ち、固有種も多く記録されている。400種以上の鳥類、爬虫類は82種、両生類は92種が生息している。特に蝶は約1,000種も生息し、蝶の天国となっている。アフリカ大陸に生息する霊長類のおよそ4分の1が、この森で生きているという。まさに生物学的に多様性に富んだ森である。

公園は1986年に設立され、1,260km<sup>2</sup>の広さがある。平均気温27度、湿度は86%、年間およそ5,000mmの雨が降る。



コーラップの森への吊り橋の下を激流となったマナ川が流れる



コーラップの森



コーラップの森を守るマナ川



コーラップの森の中を流れるマナ川の支流